

## 閉会のあいさつ

吉田道雄

(財) 集団力学研究所所長  
熊本大学教育学部教授

皆さま、本日は長時間にわたりましてご熱心にご参加いただきありがとうございます。ここで簡単にごあいさつさせていただきます。

会長のご挨拶にもございましたが、私どもの研究所は本年をもちまして40周年を迎えることができました。これも一重に皆さま方の支援の賜と深く感謝いたしております。

私事で恐縮ですが、私は1967年(昭和42年)に九州大学に入学いたしました。ある日、六本松の教養部にございました学生会館で昼食をしながら、九大新聞に目を通しておりました。その中に、「集団力学研究所を創設することになった」と、誇らしげに語っておられる三隅先生の写真が新聞に載っていました。私自身、かねてから集団力学に関心をもっておりましたから、それを読んでワクワクした記憶がございます。

この1967年はどういう年かと申しますと、10月に当時の佐藤首相の南ベトナム訪問阻止ということでデモ隊と警官隊が衝突する事件が起きました。その際に、京都大学生が亡くなりました。また翌年の1968年1月はエンタープライズが佐世保に寄港した年でございます。さらに6月には、米軍のファントムが九大に墜落するのです。そんな騒然とした時代でございました。

大学の中でも紛争の火が燃え上がり、ゲバルト闘争やストライキなど、とにかくいろいろなことが起こりました。そんなわけで大学で授業を受けるチャンスがなかったこともあり、出来たばかりの研究所に入り浸っておりました。研究所は旧富士銀行のビルの中にある九州生産性地方本部で机をお借りして活動を開始いたしました。その後、向かい側にありました旧長銀ビルに移り、さらに川端の西日本相互銀行の博多支店に移動することになります。ご承知のように、今は博多座になっているところでございます。そして10年目を機に法人化を達成し現在の西日本新聞社の新しいビルに移って、現在に至っております。

この時代、私たちは極めて穏やかに研究活動を行っておりましたが、大学で集団力学の話をする、友達から「おまえがやっているのは集団暴力学じゃないか」と冷やかしを受けたりもしました。懐かしい思い出です。この40年間、産業界は重厚長大から軽薄短小へと移り変わりました。それからバブルが絶頂に達し、それが弾けて日本国中が暗い時代を迎えました。しかし、私どもはこの間も、集団との関わりを通して人間を理解したい、集団を大事にしたい。それがわが国を元気にすることにつながるという信念をもって活動を続けてまいりました。このことにつきましては、いささかながら自負しております。

今日も皆さまの充実したお話をお聴きして、私どもがやってまいりましたリーダーシップや対人関係の仕事が極めて大事だと実感しました。私は組織を元気にし、不祥事を根絶するために、「知識から意識へ、そして行動へ」という流れが大事だと思っております。知識があっても、それを意識化しないと行動にはなりません。飲酒運転を

してはいけないという知識は誰でも持っています。しかし、事故は途絶えることがない。それは知識が意識に、そして行動になっていないからです。そして、意識化のためには集団との関わりや対人関係、リーダーシップ、さらには仕事に対する責任感や誇りが必要だと思うのです。

それから、本日の「学習する組織」に求められることは、単純に世の中全体で約束を守るということでもあるという感じがします。たとえば、飲酒のことを考えてみましょう。19歳と365日と23時間59分59秒までは、アルコールを飲むと体に悪い。しかし、それを1秒越えると百薬の長になる…。そんな科学的根拠などまったくないのです。これは論理ではなくて、単なる約束なのです。約束は守らなければなりません。もしも約束が実態に即していなければ、変えればいいわけです。とにもかくにも約束は守る。それを実行しない限り、世の中はおかしくなるわけです。このごろは、コンプライアンスや安全の問題など、いろいろと世間を賑わすニュースがあふれています。その点に関して、私どもに対する期待感が高まっていますことは、喜んでいいのかどうか、複雑なところがございます。しかし、研究が活かされるのであれば、積極的にお手伝いしたいと考えております。

私どもの研究所が40年を迎えたという思いに加えて、これからも一生懸命に前進していきたいという気持ちでいっぱいでございます。基調講演を行った杉万副所長と私は3つ違いですが、学生時代からの付き合いでございます。この二人が昨年からは皆さま方のバックアップをいただきながら何とか研究活動を続けております。今後とも、皆さま方のご支援を賜りたいと存じます。

本日はお忙しい中、ありがとうございました。